

## リヒテンベルクの生い立ちに関して

——ダルムシュタットの教育からゲッティンゲン大学入学まで——

佐々木 滋\*

そもそもリヒテンベルクが自然科学の分野に進むことになったきっかけは、いったい何処にあったのか、こんな問いから筆者はかれについての伝記を覗いてみることにした<sup>1)</sup>。

ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクは1742年7月1日の日曜日午後、父ヨハン・コンラート・リヒテンベルクと母ヘンリーテ・カタリーナ（旧姓エックハルト）の間に十三番目の子供として出生した。生地はダルムシュタット南東のオーバーラムシュタットである。その地の教会牧師を務める父は52歳、母は45歳であった。非常に子沢山の家庭であったが、これら13人中4人は死産であった。これは教会記録簿に記載されているものだけであって、記載に無い死産の子供がなおも4名いたという。これらの沢山の姉や兄たちに恵まれたかにもえた8人中4人の姉や兄はさらに幼くして他界する。かれが生まれたとき、結局、24歳の姉クララ・ゾフィー、18歳の兄ゴットリープ・クリストフ、8歳半の兄クリスティアン・フリードリヒ、5歳半の兄ルートヴィヒ・クリスティアンだけであった。まずは子供に理解のあった父親のことを簡単に紹介すると、かれは同郷ダルムシュタットに生まれ、ギーセン大学、イエーナ大学の神学部を修了後、オーデンヴァルトのノインキルヒェンの牧師を振り出しに、翌年1717年27歳で牧師の娘ではやくに両親を失ったヘンリエッテ・カタリーナ・エックハルトと結婚。晩年は75名の牧師を統括する大教区監督になる。この要職に就いたのもつかの間、一年数ヶ月にして61歳の1751年7月17日に他界する。この父がゲオルク・クリストフ（以下ゲオルクという）にしてやったこと、生涯を共にした年月、僅か9年間であった。父を想う1787年1月1日付けの手紙で次のように回想される。

「わたしが知る限り、父は当時ひとりの聖職者にしては数学と物理の優れた知識を持っていた。君主の注意を引きつけたのはまさしくこれであった。どうやら父は他の者よりまんざら不味くもない神学生であったから、徐々にではあったが、幅広い人間関係や金があったわけでもなく、志願したのでもでなく、辺鄙な年間の四分の一は雪に埋もれるオーデンヴァルトの寒村の教会牧師からこの国一番の聖職位に上り詰めた。かれは子供たちにかなり小さいときから宇宙の仕組みの手ほどきをするのが常であったし、自然物理への愛好を吹き込んでくれた。この自然物理は、わたしがその感化をほとんど上の兄の二番煎じで認めたものではあっても、プリマ学級の生徒としては当時、残念ながら現在各大学の多くのものたちが持ち帰る知識よりもたくさんを天文学について知っていた、というよい点があった。父が自然科学に一種の熱愛感を抱いていたことの証拠を挙げてみよう。あるとき村の教会で天文学を聴衆に解るように説教壇から話したのだった。こんなに静まり返ったのは初めてだ、と

\* 一般教育 助教授 ドイツ文学

父は語ったそうである。のちに農民たちは代表のものをよこして是非又近いうちに星の話をしてもらいたい、と頼んだのだった。」<sup>2)</sup>

このように父親は18世紀前半のヘッセン・ダルムシュタット方伯領下できわめて才能のある有能な聖職者であった。建築術においても並々ならぬ能力を発揮し、教会建築の設計はもとより現場での指導や手間賃の支払いなど一切を行ったらしい。最初の任地の牧師館を始めとしてかれの指導した新築・改築の諸教会はギンスハイム、ビショフスハイム、グンダアンハウゼン、トゥレプール、ラウンハイム、エーゲルスバッハなどの地にあり、一般建築では1745年から5年間をかけたダルムシュタット孤児院である。この建物はその後ルートヴィヒ・ゲオルク・ギムナジウムの建物としてその名残がとどめられている。これだけでなく父は聖歌の作詞においても遺憾無くその才をこれまた発揮し、1717年にはすでに七つの贖罪詩編のカンタータを書き上げ、翌年には曲にして教会で歌ったという。以後かれは四半世紀の間、彼の妻の義兄弟にあたる楽長クリストフ・グラウプナーが作曲を手がけるシュロス教会に教会音楽の歌詞を供給し続けたのである。作詞の韻律化も難なく、溢れるように出来上がり、日に6から7、12も出来ることがあったらしい。ゲオルクの父譲りの流暢さは、カンタータにではなく、むろん手紙、日記(雑記帳)にあることは確かである。こうした多忙にもかかわらず父はその片時を子供らの陶冶・育成に捧げた。毎日、かれらが授かる教養は数学、宇宙の仕組み、自然科学であった。1744年の大彗星接近<sup>3)</sup>のときは僅か二歳足らずであったが、父親に抱かれ七つの尾を持つ彗星を見上げていたのだという。父親は1749年当時としては珍しい物理実験の機器を子供らに作ってやる。そのなかには静電発電機があった。ゲオルクにとっては、僅か三年間のオーバーラムシュタットの田園生活であったが、かれの心には確実な痕跡をのこすことになる。1745年7月に一家は、方伯ルートヴィヒ VIII世(在位1739-1768)の居城都市ダルムシュタットに移り住み、以後ゲオルクは都会の子としてこの当時僅か九千人の町で幼少年期を過ごす。方伯ルートヴィヒは狩猟に明け暮れし、ほとんどをクラニヒシュタインの狩猟館で過ごす。先代から始まる芸術保護・奨励は先に挙げたグラウプナーの作曲、ドイツオペラの上演などでダルムシュタットの名声をこの時代に高めたといわれる。絵画は宮廷社会の肖像画、狩猟画が多少、勢力を得た。文芸文化はこの宮廷からは皆無といってよい。ルートヴィヒ VIII世の死後、「大方伯」と言われたルートヴィヒ IX世の後、カロリーネの保護・奨励下によろやく若い世代の力が、ダルムシュタットの精神的世界に独自の顔を供えることになる。ゲオルクがゲッティンゲン大学に去ってしまってからではあるが、若きゲーテの友人であるメルク、ヘルダーの妻の義兄弟であるヘッセ、エルンスト・アダム・シュライエルマッハー、そして1772年から1774年までフランクフルトから足繁く訪れたゲーテなどがこの町に集まることになる。ゲオルクとゲーテの出会い、しばらく後の1783年にゲーテの第二回目のハルツへの旅の帰途、ゲッティンゲンに立ち寄るときが最初である<sup>4)</sup>。これについては別の機会に譲ることとして、ともかくこのダルムシュタットは商業・生業とは無縁の官吏、役人たち中心の狭い隔離されたところであり、事実、ゲオルクにはいわゆる市民階級の親友がいなかった。これは当時は下層階級、すなわち市民・農民階級の過度の教育熱はこの町では歓迎されない傾向がみられことによる。後の1774年9月12日の大公令によって市民・農民階級出の子息の大学の勉学が、ほとんど禁止されてしまう。方伯の公官吏たちがこれを徹底させたが、この禁止が解かれるのは1819

年になってのことだ。

ゲオルクはシュタートシューレという、方伯の基金によるいわば公立の学校に1752年の10歳まで学ぶ。ここではすでに一部の生徒にはラテン語の授業があった。生徒数は100名を超えていた。このころのかれの教師には、神学生のヨハネス・カウムという能書法に強い関心を寄せていた人物がいた。後のゲオルクの手稿の読みやすさは、彼によるところが多いという。父親の死から一年以上たった1752年秋、かれはダルムシュタットのPädagogiumのテルツィア学年級に入学する。ペダゴギウムという名称は1827年までで、生徒たちはピウないしピオと言っていたが、遠くは30年戦争時の方伯ルートヴィヒV世によって準備され、彼の子ゲオルクII世が設立したことから、のちにルートヴィヒ・ゲオルク・ギムナジウムと称されている。このピウでは48歳の校長J.M.ヴェンクをはじめとして20歳から39歳の多くは神学生、副牧師、合唱指揮者などの教師が中心であった。この学校には四学年があり、それぞれ下からQuarta, Tertia, Sekunda, Primaとなっている。Quartaには8歳で入学する。それぞれの学年は2年間の就学期間がある。この合計8年間の就学年数に校長ヴェンクは、さらにSelektaという最上級クラスを設けた。その名の通りセレクトタはかなり厳選された選抜クラスであったようである。セレクトタを除く合計8クラス中の1クラスあたりの生徒数は25ないし40名余りであった。ゲオルクが入学した当時の各学年の担当はQuartaが合唱指揮者のA. Abele、TertiaはH. C. Naberhorn、SekundaがD. Frey、そしてPrimaは副校長のA. Freyであった。ゲオルクはテルツィアから入学するが、ここでクヴァルタから勉強をしていれば、ギリシャ語初級の読みと文法、ラテン語の語形学、ドイツ語正書法をそこで学ばなければならなかった。ところがこのQuartaを担当していたのはすでに述べたように音楽を重んじる合唱指揮者であったが、教科と教師の特性に不釣り合いがみられたためか、このクヴァルタを避けて迂回入学をゲオルクはすることになった。要するに評判の悪いクヴァルタには、地位あるものたちは、自分の子息を入学させるにあたり、条件をつけて、テルツィアから入学させたのである。ここで各学年での教科をみると、Tertiaではギリシャ語中級語形学、日曜日毎の福音書抜粋章句、ヨハネの福音書、コルネリウス・ネボス、キケロの小書簡、音調論、韻律朗読、Sekundaでは新約聖書、ギリシャ語宿題、コルネリウス・ネボス、ユリウス・シーザー、種々のキケロの書簡、オヴィド、クルチウス、作文文章論演習、神学希望者へのヘブライ語基礎、ドイツ文学入門、そして歴史、地理学が始められる。Primaでは新約聖書、クルチウス、キケロの書簡と演説、ヴィルギル、年代指導、課題・即席課題作文、ラテン語・ドイツ語による詩文推敲などであったが、ヴェンク校長はセレクトタの生徒にはこうした伝統的教科の他にさらにバビロニア語、フランス語、神学、哲理、数学、歴史、修辞学、文学、地理学、年代研究、系譜学、紋章学、古代学、算術、能書法、唱歌術、書簡法などを加えた。このセレクトタはギムナジウムと大学の間であり、大学入学を急がない場として設けたものであった。父親が他界した時、母親には33歳の娘を筆頭に、27歳、17歳、14歳の息子たちと9歳のゲオルクが残された。三人の息子たちの学費でゲオルクにまでは、もはやその余裕はないかに見えたが、兄ゴットリーブ(32歳で他界)はすでにゼーハイムの役人となっていて、ゲオルクの面倒をよくみたようである。

このセレクトタでの教科の特色は、数学とギリシャ世俗作家の読み物であった。それにはパレファート、プルタコスなどが選ばれ、ホメロス、ソフォクレス、クセノフオンなどはダ

ルムシュタットの教案にはなかった。ゲオルクはこのセレクトタに3年間在籍するが、これもすでに述べたように、すぐにかれを大学に入れるのには経済的余裕が母にはなかったからである。数学は副校長アダム・フライによるきわめて初歩的なものであった。数学は哲学の一部分と考えられていた。神学を修めた教師たちが用いる数学の教科書も一種の哲学案内書であった。1752年および1769年でも依然 F. Chr. バウマイスターの『Elementa Philosophiae』(1747) が入門書として挙げられていた。ところが1758年になって初めて数学の基礎入門書がゲッティンゲン大学の A. G. ケストナーによって著された。ゲオルクはこの書を個人的に学び、学友にはその内容を学校以外で教えたりしたらしい。多くの教科こそあっても、物理学や他の自然科学の教科が全くみられなかったことに現代からみると、以外の感を免れない。このことは、大学においてさえも自然科学の学部学科が独立するには、まだ先の話であり、自然科学部門は哲学部に所属していたことに起因する。従ってダルムシュタットのペダゴギウムにも自然科学の教科は、プリマ学級まではこの時代にみられなかった。全体としてみれば、この学校はルソーやバセドウなどによる新しい革命的教育理想には程遠くても、学ばれる言語知識を授業目標とするものから、実践的な自然科学へと移り変わる過渡的なものに、ゆるやかに道を開く啓蒙主義の世界に由来するいくつかの新しさはみられた。1778年に J. M. ヴェンク校長の息子 B. ヴェンクは「いくつかの地ではリンネの植物学、巻き貝や蝶の体系的分類、および実験物理の豊かさを学校財産にしようと非常に熱心である。このリアリズムは何のためか。学校が学者をつくろうというのか。学校はどちらかということこれらの学問と遊ぶことと、まじめな仕事としてそこから何かを行うことにはやくからかれらを馴染ませるであろう。」ものという。奇妙なことだが、自然科学は市民生活で学識のない階級にとってだけ関心があるもの、と思われていたことである。もともと学識教養ある階級がとくに学校に期待することは、古典語における徹底指導であった。セレクトタでの特殊性は半年毎の雄弁・論争術の公開披露である。1760年の公開演説のラテン語で書かれた招待プログラムには「ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクが人間知の知識の真の促進に数学の勉強はどれほど寄与するかに対決する。」と案内される。これはかなり異例のことであった。なぜというに、学校では本来この数学はプリマまでの正規の教科でなかっただけである。さらにセレクトタ修了の卒業祝賀祭でも他の14名の最後に演説をすることになるが、案内プログラムには「講演者の最後はゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクが行う。かれは数年間勤勉と頭脳明晰により賞賛すべき首席を占め、そして他の六名の立派な成績を収めた学友たちと、いまやわがペダゴギウムとその紀律から離れることとなった。かれはドイツの詩から学問と文学の真の価値について講演をする。」生徒がこのような賞賛されることは極めて希なことであり、プリマ学級とセレクトタを併せて五年間の学業成果でもあり、ただならぬかれの有能さを証言するものであろう。

この時代の学友のことはのちにゲオルク自身が『思索の書』のなかで様々に回想している<sup>5)</sup>。かれら学友のおおかたは父親が牧師であったり、官吏であったりする。またかれら学友はゲオルクよりもはやく大学に進学してしまう。ゲオルクはペダゴギウム修了後、約一年半を母のもとに過ごすことになる。その間にすでに1759年にギーゼン大学で神学を学んでいた学友クリスティアン・ハインリヒ・ツィンマーマンは、帰郷すると連日連夜、ゲオルクと一緒にホメーロスと数学を勉強したという。かれとの書簡も多く残されている。ツィンマ

ーマンは詩人としても登場し、Martialのエピグラムの翻訳も試み、かれ自身の格言詩は1783年のゲッティンゲン年刊詩集にも掲載された。この仲良しの二人に共通するのは、ゲオルクの父親が最後に就いたダルムシュタットの教区監督にツィンマーマンも後に就任することである。時代の隔てはあれ、ゲオルクの父親の後任者であったわけである。ドイツ文学史上でこのツィンマーマン以上に有名なのが、ゲオルクよりは年長のヘルフリヒ・ペター・シュトルツとゲーテの青年期の友人ヨハン・ハインリヒ・メルクである。むろんゲオルクもこの二人とは交流があった。

冒頭に父親が天文に詳しい人であったと述べたが、父の死後もゲオルクは数学と天文学には抜群の知識を持っていた。後にゲッティンゲン大学で学ぶ時に、ケストナーの指導下にスウェーデンからの留学生リュングベルクと共に天文台での観察を任されて、彗星などの観察をしたりすることになる。その知識を評価されてか二度の英国滞在のいずれにも、国王ジョージIII世みずから天文台などを案内されたりする。話は先走りしたが、この頃の天体観測にかれは常にセムラーの肉眼観察教本と携帯用天球儀をもって幾晩も観察したといわれる。

こうした宇宙の真理を究めようとする姿勢が、ゲオルクの宗教観をいかなるものにさせたかも興味深い。ダルムシュタット時代のゲオルクの宗教観は、いくらか内面相克的な側面を呈している。父親は新教の正統派と敬虔主義の間で、どちらかというところと正統派よりの教会政治的立場の側にあった。『わたしのよく知る人の性格』と題して自己ポートレート風に次のように告白する。

「宗教についてかれは子供としてすでに非常に自由に考えていた。しかし自由思想家であることに名誉を求めることは決してなかったし、一切を例外なしに信じることに名誉を求めもしなかった。かれは熱情をこめて祈ることができたし、旧約詩篇九十番を崇高な、名状しがたい感情なしには決して読めなかった。山となる前に……の箇所は、歌え不滅の魂を……というものよりもかれにとっては果てしない多くのものであった。」(B77)<sup>6)</sup>

あるいは1779年一月に記された箇所では、「かれが十六歳の時からキリストが神の子であることをもはや確かめられなかったとき、このことがかれには周知のこととなり、かれにとっても癒着したので論証することなど、もはや全く思いもしなかった。かれが残念に思ったことは、キリストがみずから書かなかったこと、そしてアリマティアスについてのヨセフの知らせを、もはやわれわれに残してくれなかったことであった。敬虔な狂信者が、祈禱の強さへの自分の信仰、すべての点での自分の迷信、跪き、聖書に触れ、聖書への口づけ、儀式張った自分の聖母崇拜、自分の周囲を漂う霊の崇拜など、そのような事柄のなかで何ができるかは、かれには余りにもよくわかっていた。」(F1207)<sup>7)</sup>

「かれは小さな一枚の紙切れをもっていた。そこにかれは、特別にかれのために神によって示された恩寵とみなすものだとか、他に全く説明できぬものを普段書き込んだ。かれの熱心な祈りに時折、神様どうか、この小さな紙切れに何かを与え賜え、と口ずさんだ。そのような表現、最も感じやすい魂の爆発は、言わば神と魂のあいだの信頼-秘密である。」(D99)<sup>8)</sup>文中の「かれ」とはむろんゲオルク自身のことであり、いずれも自己ポートレートである。

ところでギムナジウム卒業試験合格者はただちにいずれかの大学に入学しなければならない規則があった。卒業したものが半年や一年間も腰に剣を下げあちこちぶらついたり、かれらが学んだことを怠惰な日常でふたたび忘れてしまうようなことは断じて行われてはなら

ないためにもそうであった。しかしゲオルクは上述のごとく一年半も足踏み状態であった。すでに64歳になる母親と44歳の姉のいる静かな家庭で過ごす生活は、その後の思索作業の基礎がこうした時期の沈想下に熟していったことは想像に難くない。とはいえゲオルクが大学に行くのがこれだけ遅れた理由は、健康上の理由ではなく、すでに父親亡き後の経済的な支援がゲオルクに廻らないのであった。兄の24歳になるルートヴィヒはまだハレ大学にいた。その上の兄クリスティアンは27歳ですでにダルムシュタットの官吏になっていた。一番上の兄ゴットリーブはゼーハイムの法官であったが、1756年には亡くなっている。こうした三人の息子たちの学費で資力がついた状態から母親は、方伯ルートヴィヒVIII世に、亡き夫、大教区監督の息子ゲオルクに学費の援助を請願したようである。さしあたり適当な時まで待つ他はなかった。1762年8月ほぼ一年の待機期間を過ぎる頃、ゲオルクの母は方伯にこんな請願の書簡を送る、(文案も手書きもゲオルクが揮毫された)

「悄然とした寡婦の状態は、はやいものでもう11年になります。この歳月に大きな他の費用以外に、まだ資力のない子供らと共に二人の息子を大学に出しました。それによってわたしの末の息子ゲオルクに同じ援助をすることが不可能となってしまいました。ここの学校の先生の証明に因りますと、まったくのひとりで哲学、殊に一般高等数学に学業を捧げたいという彼の堅い意図は、将来この国で何らかのお役にたつであろう、と申しただけにもかかわらずでございます。従いまして陛下様、畏くもこのお願いを以ちまして必要な大学学費によるわたしの末の息子の勉学を御慈悲深く御支援下さり賜りますよう謹んでお願い申し上げます。」<sup>9)</sup>

この申請はその後しかるべき経過をたどるが、翌年1763年4月になってようやく一公務員死亡によって帰属された年額100グルデンをヘッセン国庫で処理できることが判明した。方伯は、ゲオルクが将来ギーセン大学の教授か、ライン河畔の護岸工事技術者として国に役立つはずだ、とおそらく考えてのことか、枢密院国庫から年額100グルデン差し出す用意のあることを表明してくれたのである。こうしてゲオルクはようやく、向こう数年間の年額200グルデンと、行きの旅費30グルデンの見込みができた。審査に加わった役人たちも一致して、かれが大きな期待にこたえる能力と才能のあることを疑わなかった。

1763年5月、満21歳になる2ヶ月前に、念願のゲッティンゲンでの大学生活を始めるために、ゲオルクは故郷ダルムシュタットと母親のもとを去ることになる。その後、二度と故郷に帰ることはなく、故郷のことはさまざまに回想されるが、マイン河畔までは来ることがあっても故郷の地を踏むことはなかった、という。それほどかれは精神的に実りあるゲッティンゲンの地に生涯根付くこととなる。

#### ☆

ゲッティンゲンを勉学の地を選んだ最大理由は、なんと言ってもアブラハム・ゴットヘルフ・ケストナーの存在である。すでに述べたように、彼の数学入門書はゲオルクが熱心に学んできたものであり、数学を勉強したい、というかれの意志はまことに堅いものがあった。勉学の地をどこにするか、という希望は若きゲーテの場合はなはだそれに叶わぬ事情があった。ゲーテの

「父は青年時代をコーブルクの高等学校で送つたのだが、此学校は独逸の学校中第一位を占めるものの一つであつた。彼は此処で語学及びその他学問的教育に必要とせられたものしつかりした基礎を造つた。後ライプツィヒで法律学を研究し、最後にギーセンで学位を獲た。熱心と勤勉とを以て書き上げた学位論文『相続の承諾への選択』は今日尚ほ法学の教授達から賞賛されて引用せられている。自分自身に欠けたものを息子に於いて実現しようとするのは凡ての父のいぢらしい念願である。これは宛かも此世の生活を再び繰返して、最初の経歴を今度こそ役立たせようとしてゐるようなものである。父は自分の知識を恃んでゐて、忠実に事を成し遂げる堅忍の確信もあり、当時の学校教師に對する不信用から、自分の子供を自分の手で教育しようと思はれるだけ、個々の課業をを本職の教師によつて補はせようとした。教育上の素人道楽が既に一般に現はれはじめてゐた。それには公立の学校に就職する教師達の銜学癖と憂鬱とがおそらくその第一の原因となつてゐるらしかつた。或るより善きもの求められてはゐたのだが、専門の士によつて授けられない凡ての教育は、如何に欠陥の多いものであるかは忘れられてゐたのである。」<sup>10)</sup>

自分にはない天賦の才能を認めていたゲーテの父親は、自分が息子の立場であつたなら、放埒に才能を浪費することはないであろう、とゲーテに言つて聞かせたりする。ゲーテは「父や其他の教師が私に授け得た教育では満足が出来なくなつた」が押韻したラテン語入門書のたすけで言語の形式と用語法を会得する。彼の文才を高めることに与つたことのひとつに、父親が課題作文などで出来具合を喜ぶと、「その為には父は私に子供としては多額の金を與へて賞與とした。」ことも一因であろう。ゲーテの父親は「私が大学に入学するのを殆ど待ち切れぬやうであつた」から息子にも「愛着をもつライプツィヒで彼と同じように法律を研究し、それから尚ほ他の大学へ通つて学位を取るべきであると云い渡した。此第二の大学は、私が何処を選ぼうとも父に依存はなかつた。ただ、ゲッティンゲンだけには何故か分からないが、幾分の反感を有つてゐたといふことは私にとって遺憾だつた。何故かといへば、私は此大学に多大の信頼と希望を寄せていたから」である<sup>11)</sup>。(傍点筆者)

さらに、ゲーテは同じ自叙伝の第六章では次のように述懐する。

「他日私の名がハーゲドルンや、ゲレルトその他の人々と並んで、榮譽を擔ふだらうといふ確信はたえずひそかに懐いてゐた。しかしそうした使命だけでは私にはあまりに空虚で不満足に思はれた。私はあの根本的な研究に眞剣に一身を捧げ、古代にたいする見解を深め、自分の仕事にさらに迅速の進歩を心がけて、大学の教職に就く資格あるものにならうと思つた。大学教授の地位は自己の教養を完成し、他人の教養にも寄與しようと思へる青年にとつて最も望ましいものであると私には思はれた。かういふ考へで私はいつもゲッティンゲンに目を着けていた。ハイネやミヒャエーリスやその他の多くの人々に私の全信頼が置かれてゐた。私の切に願ふところは、彼等の脚下に坐して、その教へを心に銘するといふことであつた。しかし父は頑として動かなかつた。私と同意見であつた二三昵懇の人たちが父を説きつけようといかにつとめても、彼は私がライプツィヒへ行くべきだといふ意見を固守した。かうなると、私は父の考へや意志に逆らつても自分自身の勉学上、処世上の方針を執らうとする決心を今こそは正当防衛だと考へた。それとは知らずに私の計画に反対した父の頑固が私の反抗心を強めたので、私が大学在学中、また世間に出てから通過しなければならない勉学上、処世上の進路を父が語つて聞かせ、くり返して説いたとき、彼の長談義を傾聴するとい

ふことなどは一向本気に心にもかけなくなった。ゲッティンゲンへ行くすべての希望が絶たれてしまったので、私は今はライプツィヒに目を向けた。」<sup>12)</sup> (傍点筆者)

いずれの親も文字どおり親身になって我が子の大学進学を心配していたことが解る。どちらがどうと言うことは、差し控えるが、共通していたことは勉学の地ゲッティンゲンへの熱望である。ここでこのゲッティンゲン大学のことを簡単にこの時代に即してみるのも決して無駄なことではあるまい。筆者がここで強調する点は、この大学の学術誌のおかれた位置である。なぜゆえにゲーテが熱心に、後になってリヒテンベルクに光学論文、色彩論文、実験道具などを手紙と共に送り、ゲッティンゲンでの学術誌に掲載し、認めて貰おうと依頼したのかも、この大学の位置、学術雑誌のレベルの高さにあったからといえよう。またリヒテンベルクが丁寧な長文の返書をゲーテに送るが、そのなかでヴァイマルでは手に入らぬであろう本も送る旨が記されている<sup>13)</sup>。この図書館がきわめて充実していたことも、学術誌の位置と無関係ではない。このことは後述する。

ゲッティンゲン大学の講義要綱によれば<sup>14)</sup>、正式名称は Georg August Universität という。その創設は 1692 年のハノーヴァー選帝侯位国と大英帝国の同君連合（一君主二国家）に因るところが多い。ハノーヴァーに居城する Welfenhaus の分家を、それまですべての方針で共同であったヘルムシュテート大学から切り離し、選帝侯 Georg August (1727-1760) であると同時に英国国王ジョージ II 世でもある王を新設計画のために獲得する。創設に Georgia Augusta の名称を与え、自らと自分の後継者に学長ポストを留保した創設者は、設立と大学事務局に枢密顧問官の一人、Gerlach Adolph von Münchhausen (1668-1770) を任用した。このミュンヒハウゼンは当時もっとも成功を収めた新設のプロイセンのハレ大学に学び、かれのライフワークとなるべくこの任務に特別に充てられたのであった。かれは古い大学の権威追従に反対するハレ大学を手本とし、この新設ゲオルク・アウグスト（ゲッティンゲン）大学のために既にハレ、ヘルムシュテート、イエーナ、ライプツィヒなどの各大学で勉強している学生を引き抜き集めなければならないから、ここに集める教授達を募り、かれらが業績を促進できる研究環境、労働条件も整備したという。1734 年の当大学の学則定款は、現代からみれば、何ともないようにみえる、教員に教えることの自由、出版刊行の自由、それに伴い研究の自由を保証したために、学問の自由の里程標石となったほどだ。

それとともに、その一端である学術誌の充実のことを、述べておかねばならない。ケストナーがまだライプツィヒにいた頃、かれの最初の論評を寄稿した『デア・ゲッティンギシェン・ゲレールテン・アンツァイゲン』誌（以下 GGA 誌と略称）は、すでに 15 年を迎えていた。その前史は 1733 年にまで遡り、アルトドルフ、ヴィッテンベルク、ハレ、イエーナ、とりわけライプツィヒの諸大学を規範としてハノーヴァーにおいてもこの新設大学ゲオルギア・アウグスタの学術的成果を高めるために、学術誌の刊行機関を設ける必要性があった。1739 年以降、週二回刊行の『Göttingischen Zeitung von Gelehrten Sachen』紙は普遍的スタイルの純粋な批評機関誌であった。刊行する者の意図は、国内・国外の学術文献にできるだけコメントを加えた内容抜粋の形で読者に紹介する方針であった。この雑誌の特徴は、1700 年当時すでに専門誌が発展の萌しをみるようになるものに対する普遍的観点である。アルブレヒト・フォン・ハラ<sup>15)</sup>が 1747 年に GGA 誌の編集を引き継ぐと、年間発行



に先立って各自批評者に要請するプログラムが送られる。専門知識や一般的学識の他にかれが求めたものは、ものごとの価値への有効な判断を下すことであり、引用は出来るだけ短く、簡潔に、本質的について、些末なことは省き、重要な材料として述べることにしている。こうして読者に簡潔な書評を提供し、購入前の十分な予備知識を提供したのである。プログラムはこれにとどまらず、批評の目指すところは、読者の美的センスと判断能力を伸ばすところにあった。これは本来の啓蒙的目標でもある。価値ある批評の意義を強調してハラールは、

「読者に対して話の内的価値の予めの感触を与えずに、単に話の内容を知らせようとするとき、われわれの雑誌はまったく塩味もなく、力みも私益もなく、プレスの不必要な負担もないようなものであろう。(……) われわれは正当かつ根拠ある批評は、学者の世界においては不可避の職務であることを完全に確信するものである。批評は駄作家の筆に驚愕を与える。批評は、凡庸なものへの論駁を強いるであろうし、偉大なもの自体には、何なんら不完全なもの、軽率なものも供給しないことを警告するであろう。批評は国中に美の鑑識力を広めるのである。」<sup>16)</sup>

ハラールが求めるものは、包括的、アクチュアルな情報であり、能力のある不偏不党の判断である。こうしてGGA誌は18世紀のドイツ語圏内での文句無く、批評誌の揺るぎない地位を得、欧州各国での雑誌創刊時の見本となったという。とりわけ一貫し、持続的な刊行プログラムに大いに見習うべきところがあったのであろう。この当時、他に類をみないほどの欧州各国の書籍収集を誇るゲッティンゲン大学図書館が、欧州図書の本籍取継販売を兼ねることになる。また1753年に興された学術組合 (Sozietät der Wissenschaften) がGGA誌の発行人となり、いよいよ大学との結びつきを強化してゆくことになる。ハラールの後は、ハイネ、ケストナーとそのGGA誌を受け継ぎ、ゲオルクがいよいよそうした師らのもとで学ぶことになる。さきに筆者は、ケストナーの存在がリヒテンベルクをゲッティンゲンに導いた、と述べた。ケストナーは当時44歳であり、1756年にライプツィヒから教授として招かれる。同年秋にはライプツィヒ出身のロザーネ・パウマンと結婚するが、それもつかの間57年の春には妻に先立たれる。以後かれは42年間寡夫暮らしをする。23歳年下のリヒテンベルクよりも一年長生きをする。かれの教科書は見本とされて版を重ねても改訂が幾度も加えられ、長生きの生涯は孜孜とした研究に満ちていたといわれる。レッシングと共に学び、エピグラムも書いたこの人物と、生涯共に歩むリヒテンベルクのこの後のこと、大学生活からのこと、ゲーテとの書簡問答、リヒテンベルクのゲーテの文学批評についてなど等を含め、それらのことは個々のテーマに即して、別の機会に譲ることとする。

#### 追録：17)

現代に至るこのゲッティンゲン大学の概容を先回りしてご紹介する。創設時のことは本文中で述べたので、その後の展開は、「学者専売」の拒絶をもって新奇な、多面的な教育提供への門戸を開き、1772年には遠隔の者からは学問の「自由港」の様相を与え、哲学部は数世代も経ると従来はなかった新しい学科に富むことになる。数学なども哲学部にあったが、のち自然科学の諸学科がこの学部下に増えた。それには各種研究機関、設備装置などの補助手段も加わり、文献学研究室、植物園、天文台、解剖学ができる。特に学生、教授が同等に入力できる図書館、勉学、研究の必要性に応じて整理された図書館の目録・カタログは学術

的大学図書館の最初のモデルとして一流派をなしたほどである。18世紀の殆どの学生が法学生であったにせよ、Johann Stephan Pütterは旧教の侯国地にさえもその門を開いた。従ってGeorgia Augustaは1787年の50周年記念祭には自然科学者、普遍的教養を備えた学者、ハラー、物理学者であり哲学的頭脳を持つリヒテンベルク、文献学者にして学術オルガナイザーのChristian Gottlob Heyne、歴史学者August Ludwig Schlözer、経済学者Johann Beckmann、などを土台として揺るぎない地位を得た。その秩序のなかに「完全な大学」の理想が奨励された「世界のための大学」とナポレオンさえも敬意を払った、そのナポレオンの併合計画は、ヴェストファーレン王国(1806-1813)下にヘルムシュテート大学、ギーゼン大学、マールブルク大学を犠牲にした。ゲッティンゲンの学生でリヒテンベルクの聴講学生でもあったWilhelm von Humboldtが創設に加わるベルリン大学創設はその後優位を占めるに至る。これはゲッティンゲン大学にとっては苦難の時であったといえる。その後1837年の創設100周年には、また新しい世代のFriedrich Christoph Dahlmann, Jacob und Wilhelm Grimm, Carl Otfried Müller, Wilhelm Weberなどを輩出し、かれらは皆、アカデミックな協力下の社会的責任をこの大学の伝統において十分に心得ている人たちばかりであった。ハノーヴァーの新国王エルンスト・アウグストとの国家基本法・破棄をめぐる争いで教授達は、異なる法律観に根ざす王の要求にかれらの学術的良心を対抗させた。教授七名の免職処分は最良の伝統下にあるこの大学を、目覚め、抗議に警醒されたドイツの社会の視野にさらすことになるが、同時に大学を精神的に貧困化させ、学生も失うことになる。1886年のプロイセンに併合後も、ゲッティンゲンの何たるかは忘れられてはいなかった。図書館の充実、大学病院、物理学研究所、研究棟の完成などがこの時代であり、目的に適った招聘は、数学のDavid Hilbert, Felix KleinとCarl Friedrich Gaußとの対決をつくりあげ、物理学と化学ではWilhelm WeberとFriedrich Wöhlerの上に築かれた自然科学は、認識、新しい学科、世界に認められる賞などをめぐっての世界的規模での競争世界に入ってゆく。物理学者・化学者たちの発見の喜びは、かれらの側にある手工業者にも伝わり、かれらはゲッティンゲン精密機械工業を興すことになる。辛抱強いこうした構築の上の収穫は、ヴァイマル共和国の時代に迎えることになる。数学、物理学、化学、生物学、地球諸科学などの諸分野においてGeorgia Augustaは画期的な学術的発見の地であった。国家社会主義の人種・文化政策は1933年以降、実に半数以上の教授陣の追放、前途洋々の将来ある若い博士号をもつ少なからぬ数の研究者を追放してしまった。これが第二の窮地であった。合衆国の設立基金で建てられた数学研究所などは誰もいなくなってしまう。それでもまだあったアカデミックな協力精神と学術的エートスも大いに損なわれた。1945年の体制崩壊はこの大学にとっては新たな機会到来を告げる。精神的に飢えて大学に來たいいわゆる「戦中派」世代の教授、Hermann Rein, Herbert Schöffler, Herman Nohl, Ludwig Raiser, Hermann HeimpelそしてCarl-Friedrich von Weizsäckerなどが出会うことになった。1955年、ナチの時代に重圧をかけた教授達の復職が果たせず根強い抵抗にあったところに、この大学の「良識」は生きていたといえよう。

## 註

- 1) Otto Deneke: Lichtenbergs Leben, München 1944. S. 9-35,  
Franz H. Mautner: Lichtenberg, Berlin 1968.
- 2) An Friedrich Wilhelm Strieder, Göttingen, den 1. Jänner 1787: in Georg Christoph Lichtenberg Schriften und Briefe (以下 GCLSB と略称) Bd. 4., S. 503-504.
- 3) 彗星接近は 1766 年 4 月 8 日。1769 年 6 月 3 日の金星による日食。同じ年の 1769 年 8 月 30 日にリヒテンベルクによって最初に彗星接近が観測される。フリードリヒ大王は自国の暗い未来を憂いてこの不吉な星に眠れぬ夜が続く。この年 8 月 15 日に奇しくもナポレオンが誕生。
- 4) Zeittafel 1782-1783: in Goethes Werke, Hamburg 1960 Bd. XIV. S. 441-442.
- 5) A87, A117, A120, B110, B128, B253, B270, D99, F1207, F1210, J831, L226, L679, N144: in GCLSB, Bd. 1.
- 6) B77: Ebd. S. 92-93.
- 7) Ebd. S. 336.
- 8) Ebd. S. 171
- 9) Vgl. Otto Deneke, Lichtenbergs Leben, S. 34-35.
- 10) ゲーテ全集 第 20 巻 詩と真実 第一章 小牧健夫訳 改造社 昭和十二年三月 47 頁~49 頁
- 11) 同上書 50 頁
- 12) ゲーテ 詩と真実 小牧健夫訳 岩波書店 昭和二十五年九月改版発行 37 頁~38 頁
- 13) Albert Leitzmann: in Goethes-Jahrbuch Bd. XVIII (1897) S. 32-48.
- 14) Aus dem Vorlesungsverzeichnis Sommersemester 1994 der Georg-August-Universität Göttingen, in: <http://www.uni-goettingen.de/allgemeines/geschichte.htm>
- 15) わが国では法見列爾として 18 世紀後半の生気論訳書のいずれにも紹介されている。『蘭学と日本文化』緒方富雄編 1971 年 246 頁
- 16) GGA 1748, 3r, 5v f. In: Wolfgang Schimpf, Kästners Literaturkritik, Göttingen 1990. S. 12.
- 17) Vgl. 14)

## 参考文献:

- Otto Deneke: Lichtenbergs Leben, München 1944  
 Franz H. Mautner: Lichtenberg -Geschichte seines Geistes-, Berlin 1968  
 Wolfgang Schimpf: Kästners Literaturkritik, Göttingen 1990  
 Goethe: Goethes Werken, Herausgegeben im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen, Weimar, 1894-1909 Bd. 1-49  
 Goethes Werke, Hamburg 1960 Bd. XIV  
 Georg Christoph Lichtenberg Schriften und Briefe: Frankfurt /M. 1983 Bd. 1-5  
 Vorlesungsverzeichnis Sommersemester 1994 der Georg-August-Universität Göttingen  
 Goethes-Jahrbuch Bd. XVIII, 1897  
 ゲーテ全集 改造社版 昭和 12 年 第 20 巻、21 巻